

とっても貴重な資料と視点を提供してくれる本である。学校教育のあり方を対象化しようとしながら、身体を通したそれへの直接的分析を避け、観念的な身体論でやり過ごそうとしがちな教育社会学者にとって、豊富な歴史資料に基づいた丹

念な論考で編まれた本書は、身体および体育に着目する必要性、面白さを十二分に感得できる書物となっている。

◆四六判 332頁 本体2,300円
世界思想社 2001年1月刊

■ 書 評 ■

多賀 太 [著]

『男性のジェンダー形成—〈男らしさ〉の揺らぎのなかで—』

大阪女子大学 木村 涼子

教育社会学において、〈女性と教育〉研究から〈ジェンダーと教育〉研究へという研究潮流の進展があったことは、いくつかのレビューがまとめたとおりである。フェミニズムを背景とした女性学的研究は、これまで軽視されがちであった女性の視点を重視したために、研究対象も女性にかたよりがちであったが、そうした〈女性と教育〉研究の蓄積の上に、性差別は女性のみにかかわることではなく、男性をも含めた社会的・文化的性別および男女の関係性へと研究の関心を広げる必要があるとの認識が生まれてきた。また、かつては、女性学的な研究は女性研究者がやるものといった、メイン・ストリームからの「ゲッター化」現象があったが、ジェンダー研究といったネーミングが用いられるようになった頃から、男性研究者もこの領域に参加するようになった。

しかしながら、現在でもなお、ジェンダーを問題設定の基本としつつも、その研究関心が主として女性に向けられてい

ることは多い。女性研究者が日常生活から問題意識を発展させた場合にそうなることは、良くも悪くも自然ななりゆきともいえる。しかし、女性のみを研究対象とすることは、女性研究者のみならず、80年代末以降ジェンダーに関する調査や研究にたずさわり始めた男性研究者の中にも見られる傾向であった。著者は、そうした状況下で、男性研究者として、男性のジェンダー形成に焦点をあてて研究を重ねてこられた。この著作は、まずは、男性のおかれている状況に真正面から取り組んだという点で、貴重な教育社会学的研究成果と位置付けることができる。

本書は、全9章で構成されている。ごく簡潔に全体のねらいと構成を提示した序章に始まり、第1章ではジェンダー形成研究に関わる主要概念の定義と、男性のジェンダー形成を分析する視点および意義が整理される。第1章で最も重要な問題設定は、現代社会を「多元的変動社会」ととらえる点にあるだろう。「多元

的変動社会」とは、「ジェンダーに関する異なるイデオロギー、すなわち具体的には性差別主義と反性差別主義が、互いの正当性を争って錯綜する社会」(24頁)を意味する。「多元的変動社会」概念は、「ジェンダーの可変性」をより明確化するために用いられる。第2章では、「多元的変動社会」における「ジェンダー形成」を説明するという観点から、これまでの性役割の社会化研究が批判的に検討され、従来の研究がもつ不充分点を克服するために、生活史的アプローチの有効性が主張される。つづく第3章では、ジェンダー形成を研究テーマとする生活史的アプローチに関して、理論的枠組みが整理されている。

第4章、第5章、第6章では、以上の枠組みにのっとっての生活史の事例分析が展開される。第4章では「抑圧」「抵抗」が、第5章では「葛藤」が、第6章では「多様性」がキーワードとして位置付けられ、生活史データの分析がおこなわれている。最後に、改めて性役割の社会化研究と比較することによって、本研究の成果と課題が提示される。

本書は、「ジェンダー」にはじまり「男性性／女性性」「男性規範／女性規範」「規範的男性性／規範的女性性」「ジェンダー規範」「ジェンダー秩序」「ジェンダー意識」「ジェンダー規範意識」など、分析概念についての整理を緻密におこなっている。また、「ジェンダー形成」という研究テーマにかかわる理論枠組みおよび方法論の整理と検討について、それを主たる目的とした章である4つの章(1・2・3・7章)はもち

ろん、事例研究の各章(4・5・6章)においても、多くの紙数が費やされている。それらの整理・検討は非常にていねいに、かつ手際よくおこなわれており、評者を含め、ジェンダー研究をおこなう研究者が共通認識をつくる上で参考となることが多いと思われる。本書全体から、「男性のジェンダー形成」研究の基盤を固めたいという意欲が伝わってくる。

ただ、その一方で、概念や理論枠組みのていねいさと比して、中心となる生活史分析があっさりしており、読み手としては物足りなさがある。生活史データの分析においても著者の手堅さ・手際よさが発揮されているが、そのことがかえって生活史研究の深みやおもしろみを抑制してしまっているような印象をもった。生活史データの分析についてはさまざまな方法がありうるので、これは、評者の「ないものねだり」かもしれない。しかし、感覚的な表現で申し訳ないが、概念や枠組みの整理にみられる「ねばり」が、生活史分析にも適応されたとすれば、「語り」が持つ豊かさをより引き出したのでは、という期待がのこった。

男性に焦点を当てたジェンダー形成研究の著作が誕生した。ここから、「女性」「男性」を別個に分析するのではなく、「男女の関係性」に焦点を当てた研究をさらに発展させていくことが、ジェンダー研究にたずさわるものの共通の課題であろう。

◆A5判 212頁 本体4200円
東洋館出版社 2001年1月刊